

当時、ギブスに臥せたままの姿勢で書いていたために、「一枚の葉書を書き上げると、三日ぐらいは何もできないほど疲れきってしまうのだった」という。彼女のもとに、「その人たちからの感謝の手紙がぞくぞくともたらされた。」

三浦綾子は、その驚きを次のように描いている。

「旭川の片隅でひっそりと療養しているだけの、わたしのような者の書いた手紙が、一通の葉書が、これほどまで人々に喜んでもらえようとは、思いもよらないことだった。こうしてわたしは、全国各地に多くの友人を得た。」「(わたしのような者でも、人を喜ばせ、慰め、何かの役には立つことができるのだ)この思いが、わたしの生きていく支えとなった。前川正の死に、泣き悲しんでいるわたしを支えてくれたのは、実にこの人たちであった。」

堀田綾子の受洗の時、西村久蔵が祈った「どうぞこの堀田綾子姉妹を、この場において証しのためにお用ください」という祈りが、まさに実現したのである。手紙、そして葉書によって人々を励ます、作家三浦綾子の働きは、病床で既に始まっていたのである。

彼女を西村久蔵に紹介したのは、前川正の葉書であり、三浦光世に紹介したのも菅原豊の葉書であった。さらに後に『夕あり朝あり』の主人公として彼女がその半生を紹介した五十嵐健治を彼女に紹介したのは、神奈川県元やくざの S という死刑囚の葉書であった。前川正との往復書簡は、『生命に刻まれし愛のかたみ』として前川正の日記とともに紹介されている。作家・三浦綾子にとって葉書・手紙は、命綱の役割を果たした、と言っても決して過言ではない。

「人間はね、一人一人に与えられた道があるんですよ」(123 頁)

「…どうぞこの堀田綾子姉妹を、…神の御用に仕える器としてお用ください…」(180 頁)

わたしのような者でも、人を喜ばせ、慰め、何かの役には立つことができるのだ。(231 頁)

全国には、どれほど多くの体の不自由な人たちがいることだろう。……(280 頁)

科学的に神のいないことを証明できない限り、神がいないということもまた非科学的なわけ(132 頁)

「綾ちゃん、生きるということは、ぼくたちの権利ではなくて、義務なのですよ。義務というのは、読んで字のとおり、たしいつとめなのですよ」(150 頁)

平凡なことを平凡に詠いつつ学びしは真実に生きるといふこと(212 頁)

わたしは未だかつて、こんな真実な命がけの誕生祝をもらったことがなかった。(215 頁)

不具廃疾同様のこんなわたしに、父母は以前にも増してやさしかった。(204 頁)

彼らにとっての前川正と、わたしにとっての前川正とは、全く違った存在なのだ。(223 頁)

自分が考えているよりも、もっと命が尊いものだという。……わたしの命は、イエス様の命と引替に与えられたものなのだ。(259 頁)

「人の垢どころではない、人類の汚れた罪を一身に引き受けて、十字架の苦しみと恥辱を受け給うたキリストを思ったとき、自分ごとき人間が、人様の垢を洗うことが、何で恥ずかしい…」(266 頁)

「必要なものは必ず神が与え給う。与えられないのは、不必要だという証拠である」(270 頁)

## おわりに

『道ありき』は、1967(昭和42)年から翌年にかけて執筆された。(月刊「主婦の友」1967年1月号～1968年12月号連載)しかし、三浦綾子がこの自伝小説を書いたのは、3回目であった。

『道ありき』の原型となった二つの作品

1960(昭和35)年『暗き旅路に迷いしを』旭川六条教会月報「声」2回掲載

1961(昭和36)年『太陽は再び没せず』「主婦の友」1962年新年号掲載